

日本人の『フランダーズの犬』

井上英明*

「終わり良ければすべて良し」ということわざがある。人生の最期を有終の美で飾りたいと願うのは、普通の人間が誰しもが望むところであろう。人生の途中でいかなる苦難があっても、最後にハッピーエンドで幕引きができれば、その人の人生は満足すべきものだったといえるだろう。

しかしながらその一方で、本人の地道な努力をはるかに超えた、大きな時代のうねりの中で無念の最期をとげる人生も現実であるならば、思わぬアクシデントに巻きこまれ、命を奪われるといった理不尽もまた現実のすがたである。

これを虚構の世界——文学や映画や演劇などの作品に仕立てるとき、結末によってそれは人間讃歌か悲劇かに大きく分かれる。単純に言えば、人間讃歌は生きる喜びを伝えるものであり、悲劇は人知の及ばない、底知れぬ悲しみや苦悩、悔恨、絶望などを伝えるものである。古今東西、すぐれた文学作品は悲劇に多いと言っても過言ではあるま

い。なぜなら悲劇こそが、人間の独自の運命の写実に徹しているからである。『平家物語』や『ローランの歌』など、東西の叙事詩、近代文学に至っては枚挙にいとまがない。

本稿はこうした大人の文学に対して、特に子どもを相手とする、いわゆる児童文学の例を考えてみる。子どもの健全な成長に有益な物語は、悲しい筋立てよりもハッピーエンドの方が好ましいという考え方があろう。そこでここでは『フランダーズの犬』A Dog of Flandersが原作を離れて、その後どのように変容し、現状がどうなっているのか見ていきたい。

今回『フランダーズの犬』を取り上げるきっかけとなったのは、一九九九年の夏、この作品が映画化された折、その結末が原作通りの「悲劇版」と、原作を違えて幸せが訪れる「ハッピーエンド版」の、二通りが作られたという記事が出たからであった。結末の有りようについて、稿者は以前に『小さい白いにわとり』や『金の斧、銀の斧』などを取り上げて論じたこともあり、大いに興味を抱いている。今回これを取り上げれば、文学の枠を越えて映画にまで対象を広げることになるが、作品論として、今やあらゆるメディアに目をひろげて、広角レンズ的にとらえてみることも必要だろう。

それではまず、この作品の概略から述べていこう。この作品はイギリスの女流作家、ウィーダ Ouida によって書かれた。本名はルイズ・ド・ラ・メール (Marie Louise de la Ramée)。幼いころルイズと言わずウィーダと言っていたのをペンネームにしたということである。刊行されたのは一八七二年、日本の年号では明治五年にあたる。以来、今年で一三三年目を迎える。映画化されたのは、今回で四度目になるようであるし、今までに翻訳・翻案・再話を含めて出版された本は相当数に

のぼることを考えれば、間違いなく「不朽の名作」と言ってもよいだろう。日本では明治四二年（一九〇九）に、日高柿軒しげけんにより初めて翻訳される。ウィーダが生涯を閉じた翌年のことである。柿軒は日本基督教会の牧師であった。この翻訳本は多くの読者を得て、四〇刷を重ねた由。主人公の少年ネロと忠犬パトラッシュは、明治初期の翻訳に多くみられるように、ここでは清と斑むらという日本名に改名されている。

次に翻訳されたのはその十年後の大正八年（一九一九）、評論家でもあった加藤朝鳥の手による。登場人物名はここで原作通りとなる。『黒馬物語／フランダーズの犬』の題で、動物物語の傑作二作品として併録されている。

純真で不遇な少年と、忠実な犬との固い絆の物語は、日本人の感性にぴったりと合い、その後も新しい翻訳が次々と出版されていった。とくに児童名作集が出版される場合には、必ずといってよいほど名を連ねている。参考までにそれらを列挙してみる。

- 世界こども名作全集 小学館 全20巻 一九八六
- 世界の名作 小学館 全18巻 一九九八
- 子どものための世界文学の森 集英社 全35巻 一九九四
- 少年 世界の名作 世界文化社 全22巻 一九六八
- 少年 世界名作ライブラリー 山田書院 全20巻 一九七五
- 少女 世界こども名作一〇〇 学習研究社 全20巻 一九八九
- 子ども世界名作童話 ポプラ社 全40巻 一九八八

以上は私が手に取って読んだものであるが、他にもまだ出版されている名作集が、少なからず存在するであろう。

次に文庫本である。岩波少年文庫版は、一九五七年（昭和三二）に島中尚志訳が発行された。少年文庫だが全訳で、実に四六年もの間、二〇〇三年に別の訳者によって改訳版になるまで、読みつがれ版を重ねた。同じウィーダの『ニュルンベルクのストープ』を併録している。

もう一冊、こちらは成人向きの文庫本で、新潮文庫である。村岡花子訳のこの本は一九五四年（昭和二九）に発行され、最新版二〇〇四年版で七二刷を数えるロングセラーである。やはり全訳で、『ニュルンベルクのストープ』を併録している。現在、カバーは安野光雅氏の絵で書店に並んでいるが、先に述べたアメリカ映画実写版「フランダーズの犬」のスチール写真（ネロがパトラッシュの首を抱くシーン）がキャンペーションとしてカバーになった時期もあれば、後述するアニメ「劇場版フランダーズの犬」のスチール写真（まばゆい光に反射するルーベンスの絵とそれを見るネロとパトラッシュの小さな後ろ姿）がカバーとなった時期もある。パトラッシュが黄褐色だったり黒だったりブチだったり、三様に違うのも興味深い。当時、フランダーズで労役犬として使われていた犬は、黄褐色、茶色、黒、ブチなど外見はいろいろなのである。ちなみに原文には、毛なみは黄色で耳がまっすぐとあるので、その点は安野氏の絵が忠実である。

こうして時代の要請にあわせてとりどりのカバーをまといながら、出版以来五〇年を超えるこの本は、最も原作に忠実に訳されているとの定評である。

文庫本の次だが、別ジャンルとしてアニメ版の本や絵本がある。こちらも単行本やシリーズとして、とくに幼児、児童向きに数多く出版されている。これらテレビや映画で放映されたアニメーション作品をもとにした作品、いわゆるキャラクター本は、図書館によっては置かないと決

めている所もある。その場合は、ディズニーの映画をもとにした本もキャラクター本であるから、同じ扱いである。

さて、日本で『フランダーズの犬』が、これほどにあまねく知られるようになったのは、今まで述べてきた本だけではなく、実はテレビアニメの放映に負うところが大きい。一九七五年、アニメ「世界名作劇場」が始まる。

これはその前年、一年にわたって放映された長編アニメーション映画「アルプスの少女ハイジ」のあとを受けて企画されたもので、その第一回が「フランダーズの犬」であった。フジテレビ系で毎週日曜日、午後七時半に放映された「フランダーズの犬」は、一年間で全五二話になるが、平均視聴率二二・五％、最終回では三〇％を記録したというから、人気のほどがうかがえる。この人気の高さに、終了後すぐに「アンコール名作劇場」として、毎週水曜日の午後七時というゴールデンタイムで再放映が開始された。そしてその後、たびたび再放映されて今日に至る。ちなみにアニメ「世界名作劇場」には、他に『母をたずねて三千里』『赤毛のアン』『小公子』『小公女』『若草物語』『ピーターパン』等々があり、最終作『家なき子レミ』が一九九七年に終了するまでに二三作、二三年の長きにわたり、子どもたちに実に多大な影響を与えてきた。読書だけではこれほどに広く深く浸透したとは思われない。アニメ番組恐るべし、である。

今もビデオ店には、アニメ「世界名作劇場」の物語の数々がビデオやDVDで勢ぞろいしており、中でも『フランダーズの犬』や『母をたずねて三千里』などは人気が高いようだ。二〇〇一年には、『絵本アニメ「世界名作劇場」』が、シリーズで出版された。当時の少年少女が親世代となつて、子どもに選び与えるケースも多いことであろう。アニメはす

っかり定着し、日本の文化となつていてことを実感する。ストーリーは周知のことではあるが、ここで原作に沿って、まず話の骨子をたどってみる。

幼いネロと年取った祖父——牛乳の集配が仕事の貧乏な暮らし——パトラッシュとの出会い——風車小屋の火事——犯人にされるネロ——集配を断る村人たち——祖父の死——絵画展への応募——落選——大金を拾う——届ける——大聖堂でネロとパトラッシュ凍死——同じ墓に埋葬される

以上であるが、これに幼友達のアロア、その父コゼツなどがからむ。ウィーダは、これをたんとんと即物的に描いている。世の中の酷薄さは、ネロに放火犯の濡れ衣を着せ、仕事を奪い、小屋からの立ちのきを命じる。年老いた祖父は死に、頼みの絵画展では有力者の息子が入選し、ネロは落選する。もはやネロには死しかなかった。餓死、凍死。救いはパトラッシュが死出の旅立ちに同行してくれたことと、死の寸前にルーベンスの二幅の絵がついに見られたこと以外にはない。落選がわかっての失意の中の帰り道、ネロとパトラッシュは大金の入ったサイフを拾う。持ち主がコゼツと分かり、家に届ける。コゼツは破産を免れる。ネロはまさに仇を恩で報いたのである。しかしそれも死へ赴こうとするネロを止めることにはならなかった。ウィーダは書く。

この世に生きながらえるよりもふたりにとって死の方が情け深かった。愛には報いず、信じる心にはその信念の実現をみせようとしないう。世界から、死は忠実な愛をいだいたままの犬と、信じる清い心のままの少年と、この二つの生命を引取ったのである。(村岡花子訳)

この世はかくも苦難に満ち、死んで初めて幸せになるといふこの救いのなさ。ウィーダはこの二人を死へ追いやった人間社会の過酷さをこそ書きたかったのである。

先に、二冊の文庫本について「完訳」と紹介した。原作通りに訳された完訳に対して、ほかの童話や絵本は、原作をもとにした翻案である。ネロとパトラッシュの固い絆、アロアとの交流、ルーベンスへの憧れ、などのポジティブな面に重きを置いて書かれ、人間社会の過酷さは原作より薄められ、死の場面では、幾分なりとも救いがあるように書かれているのである。

テレビアニメの「フランダーズの犬」が日本でこれほどの人気を博し、今なお愛され続けているのは、原作にくらべ、子ども向きに救いのある作品に生まれ変わっているからにほかならない。キャラクターデザインの不憐さ、カラーのすばらしさ、いかにも子どもらしい声、アニメだからこそ表現できる、一種ファンタジーの世界である。さらにストーリーには、元気のいい二人兄弟が、ネロのちょうど兄と弟のように新しく設定され、親身になって心配してくれる隣のおばあさん、生活費を援助してくれる木樵のおじさん等も加えられている。

そして最後の場面も美しい。確かに原作通りに死ぬ結末ではあるが、天使に迎えられ守られ、ネロはパトラッシュのひく車に乗って、ほほえみながら天へ駆け昇っていく。地上では、ネロを愛する人たち、謝罪したい人たち等、大勢の村人たちが、半鐘を鳴らして雪と風の中を必死で捜しまわっている。何かを察したアロアのネロを呼ぶ絶叫——。鮮烈な印象を残す最終場面である。

原作では、天使たちも現れないし、ネロたちを捜す人もいない。ネロは人間に絶望してパトラッシュと共に死に臨む。「ふたりでよこになっ

て死のう。人はぼくたちには用はないんだ。ふたりっきりなんだ」(村岡訳以下同じ)そこへ月の光がさしこみ、おおいの外れた二幅の絵を照らす。ネロは絵を見て歓喜の涙を流す。やがて闇が戻る。

「ぼくたちはあのイエスさまのお顔を——あの世で見られるだろう。そしてイエスさまはぼくたちを離れ離れにはなさるまいよ」とネロ。ネロは死ぬことを恐れてはいない。むしろイエスさまの許へ行けることだと希望を持っている。そして二人を離れ離れにはなさらないと、イエスさまを信じている。ネロがそのような気持ちで死んでいったことは書いても、ウィーダは、苛酷な事実以外は何も書かない。次の行には、翌朝、凍死した二人が見つかったことが、たんたんと書かれている。

そのあとにコゼツの激しい後悔と泣きながらの謝罪のようす、審査員の一人で高名な画家が、ネロを天才少年と称賛したこと、号泣するアロアが語られるが、それらをネロの「青ざめた若い顔」が「もう間にあわない」と答えていた」と取りあわぬ。ウィーダは、キリスト教上、異例なこととして人間ネロと動物パトラッシュが一つの墓に葬られたことをもって、筆を措く。それは、少年があまりに強く犬を抱いているので離せなかったことと、ようやく「後悔し恥じいった村人たちが」が、同じ墓に葬るよう教会の許可を得るべく取りはからったからであったが、ネロの最後の望みは叶ったとはいえず、「離れ離れになりたくない」相手は、人間ではなく、犬であった。徹底したリアリズムである。センチメンタルとか、お涙ちょうだいとかの評からは程遠く、非情の社会が容赦なく暴かれた小説なのである。原作に手を加え、救いのある物語にするのは、子ども向け作品、あるいは映像であれば、当然のことであろうと思う。

さてテレビアニメ「フランダーズの犬」は、次に「劇場版フランダー

スの犬」として、今度は映画館のスクリーンに場を移す。先に述べた新潮文庫のカバーは、この映画の最後のシーンである。

一九九七年「世界名作劇場」が終了した年に、とくに人気のあった「フランダーズの犬」を、新しく映画用に製作したのである。監督も前と同じ黒田昌郎監督で、キャラクター・デザインや筋立てなど、テレビのイメージをそのまま引き継ぎながら、案内役として成人したアロアが過去をふり返るという形をとる。大聖堂へ馬車を乗りつけた一人の清らかな修道女。これがアロアである。うしろから世話をしている孤児院の子どもたちがついてくる。ルーベンスの「聖母昇天」の絵の下で祈る彼ら。この絵は無料で見ることができたので、いつもネロが見に来ていた絵である。「ルーベンスと同じ位すばらしい画家を知っているわ」とつぶやくアロア。それから長い回想のシーンに入っていく。最後、ルーベンスの絵の前を元気に横切っていくネロとパトラッシュ。ネロは往時のままの幼い姿である。犬の鳴き声とネロの声が重なる。「アロア、ぼくはいつもアロアのそばにいるよ」。ネロの幼友達兄弟もやって来て、今はいい若者になった彼ら子ども達の相手をして元気に走りまわっている。本編が終わり、castの文字が流れ始め、主題歌が始まる。それは英語で、画面には日本語訳が出てくる。「泣きながら私はあなたの名を呼ぶの」が繰り返して出てくる。「私はあなたと一緒に生きていくのよ」「あなたがいつもそばにいる」などのフレーズがあり「あなたは永遠に私の最愛の人、私のお友達なの。あなたが私を強くしてくれたのよ」で結ばれる。現在のアロアの心境を歌い上げているのだが、ネロたちをいつまでも忘れないという気持ちには心あたたまるけれども、アロアはこのようにして一生を修道女のままに終わるのだろうか、現世的に見れば痛々しくも感じられる。

また一方では、ネロを慕う気持ちが、アロアに修道女としての道を強い決意で歩ませているのを見ると、この作品は原作者ウィーダへのオマージュとさえ思われてくる。しかし、果たしてウィーダはこうしたアロアのその後を容認するだろうか。

アロアが修道女になって現れたことにとまどう向きもあるが、ともかくまた一段と美しい画面での新作映画は、評価も高く興業的にも成功だったようである。

かく述べてきたように、日本では『フランダーズの犬』は世に隠れなき名作として親しまれているが、海外ではどうであろうか。意外なことに、舞台となったベルギーのアントワープでは、長年、まったく知る人もなく、というのが実情であった。現在、アントワープ郊外のホボケンという所に、ネロとパトラッシュの像が建っているが、その原動力となったのは、何と日本人観光客ということである。

経過はこうである。アニメ「フランダーズの犬」の人気は、ネロとパトラッシュの故郷アントワープへの観光旅行者を、年々増加させていった。しかし、御当地だというのに、「ネロ」といっても「パトラッシュ」といっても、誰も知らないのである。きつねにつままれたような日本人観光客と、何のこともだか見当もつかないアントワープの人たち——。そこで立ち上がったのが、市の観光局の職員、ヤン・コルテール氏だった。数年にわたる彼の努力のかいあって、ついにネロとパトラッシュの像が完成するに至ったのである。

その間の事情は、一九八五年三月二十二日付朝日新聞夕刊において大きく報道された。見出しのラインが「『フランダーズの犬』の赤い風車見つけた」「ルーツ探し名作に脚光」「糸口開いた邦人観光客」と、横たて、横に並ぶ。小さくコルテール氏の顔写真。そしてネロとパトラッ

シユの像の写真はたて長。半ズボンに木ぐつをはいて、細いすねがいたいけな感じのネロ。足元にはパトラッシュがすわっている。キャプシヨンには「完成したネロロとパトラッシュの像」ホボケンの図書館で」とある。風車の写真もある。風車自体は取りこわされてすでになく、写真はそれ以前のものであるが、これが物語に登場する風車のモデルだったと確定されたところ。写真はカラーではないので、赤い色かどうかまではわからない。その下には建物の写真。キャプションに「風車の跡の学校。その名も『風車小学校』」とある。

記事は、コルテール氏への取材をもとに書かれている。アントワープを訪れる日本人が「ほとんど例外なく持ち出してくるのが『フランダーズの犬』で、観光局の「同僚も友人もさっぱり知らない」状況だったのが、「神戸から新婚旅行にやってきた若い医師夫妻」から、初めてくわしい物語を聞く。心を打たれた彼はようやく市の図書館で『フランダーズの犬』を発見するが、「約六十年の間に、ほんの二、三度貸し出された形跡があるだけだった」。それから調査を始め、ネロとパトラッシュの故郷をアントワープ郊外のホボケンという村と断定、赤い風車の跡地、「運河」はスケルト川だったこと、「聖母教会」なども特定できた。ついにアントワープ当局も動き出すこととなり、ネロとパトラッシュの像が作られた、というわけである。除幕式にはアントワープ州の知事、市長、在ベルギー日本大使、そして「ネロと同じ年ごろということ、ブリュッセル日本人学校の三年生の児童が日の丸の旗を持って参加した」のである。オランダ語（ベルギーの公用語の一つ）で初の『フランダーズの犬』も出版されたそうである。

この物語が御当地ベルギーで、かくも知られていなかったのは、オランダ語訳がなかったからというのは当然至極の理由であるが、しかしな

ぜ翻訳されなかったのかという疑問は残る。ここへきて、ようやく日本人観光客の熱気に当てられた形でオランダ語訳が実現したが、以来、国民的に人気が高まったということもなく、観光関係者など一部で知られるようになったということのようである。

つけ加えると、日本人観光客にとっては、以後この像をはじめとする名所や、ネロたちが通ったルートなどが書かれた日本語の案内書も整い、充実したネロとパトラッシュに会う旅ができるようになったのである。

アントワープ以外ではどうかであろうか。今、私の手元に、英語版 *A Dog of Flanders* がある。この本は一九九二年ニューヨークのドーバー社から出版され、一八九三年の初版本、*A Dog of Flanders and Other Stories* をもとに書かれたとの解説がある。裏表紙には、アメリカとカナダとイギリスでの価格が表示されている。とはいえ、英語圏の国々でめざましく売れているとは思えないが、しかし一三年前に書かれているにもかかわらず、絶版となって忘れ去られたわけではなく、こうして今なお売られていることは、そのこと自体たいしたことではある。先に書いたように数度の映画化のこともある。やはり日本ほどではないにしても、世界名作たるに恥じない。

それではここで、『フランダーズの犬』の日本での国民的とも言える人気のほどをエピソードで紹介したい。二〇〇〇年春、東京都美術館において「ルーベンスとその時代展」が開催された。ルーベンスといえば、『フランダーズの犬』において、シンボルとなっているオランダの生んだ偉大な画家である。本稿でもすでにその名にふれている。主催者の毎日新聞では開催に先だち特集を組んでいるが、ここではルーベンスのことを、『画家たちの王』と呼ばれるなど一七世紀のヨーロッパで最もその名を知られた巨匠ルーベンス」「バロック絵画の巨匠として名声と影

響力は当代随一を誇る」、などと紹介している。彼の作品は、教会や宮殿のために描かれた大作も多く、「生涯に二千点ともいわれる膨大な作品を残した」ともある。

さてこの展覧会のキャッチコピーは『フランダーズの犬』ネロ少年の憧れ、ルーベンスに会いに行きませんかであった。私が見たのは電車の中の掲示板であった。美術館用の大きなポスターには、このキャッチコピーは使われていないので、電車やバス用に使われたのだろう。単に「巨匠ルーベンス」と言うより「ネロの憧れ、ルーベンス」と言った方が、どれほど集客力が多かるうかと、このコピーライターの着眼点に感心さえする。裏を返して言えば、日本ではルーベンスより『フランダーズの犬』の方が、段違いに有名ということを証明しているのである。

ちなみにこの展覧会ではルーベンスの作品が一八点もあり、その数の多さは、日本では今回が初めてで、その上「日本における過去のルーベンス展にこれほどの作品は登場したことがない」というほどの傑作ぞろいであり、さらにその上、一点をのぞく一七点が日本初公開という。つまり「日本初」が三点セットになった豪華展覧会であった。会期二カ月半の閉幕数日前に、入場者は一五万人に達したというから、たいへんな人数である。この中に「ネロの憧れ、ルーベンス」につられてやって来た人も、少なくはないだろう。このあと展覧会は名古屋、京都をまわったので、ネロを通じてルーベンスに出会った人の数も、入場者数に正比例して増えたことと思われる。

ついでながら、キャッチコピーは「ネロの憧れ、ルーベンス」とは言っているが、「ネロの憧れ、ルーベンスのあの絵」とは言っていない。ネロが死に赴くときに、やっと見ることが叶った「あの絵」は、「十字架にかけられるキリスト」と「十字架からおろされるキリスト」の二幅

の絵である。「あの絵」が展示物の中に入っていないとも、「あの絵」を描いた画家の、他の絵へのお誘いに引っぱり出されるのだから、ネロの知名度、好感度たるや絶大である。

ルーベンスについて『フランダーズの犬』の中では、どのように書かれているかという点、

ルーベンスなしでは、アントワープはどうであろうか。波止場で取引をする商人のほかは、だれ一人見むきもしないきたない、陰気なごみごみした市場にすぎないのだ。ルーベンスあってこそ、この地は全世界の人々にその名を尊ばれ、聖なる地となり、美術の神が生誕したベツレヘムであり、美術の神が死して横たわるゴルゴタの丘となったのである。

(村岡花子訳)

とある。『フランダーズの犬』の書かれた年から遡ること三〇〇年になんなんとする以前にルーベンスは誕生した。アントワープは、ルーベンスの存命中から彼のかくれなき名声によってその名が知られ、死しては墓の在り処として、世界的名所となったのである。であるが、しかしウィーダの筆致はルーベンスを讚美する一方で、アントワープに対しては、何とも辛辣ではないか。作品の舞台でありながら、翻訳しようとしなかった、当時の地元の人たちの心情がわかるような気もする。

辛辣といえば、もう一つある。イギリスで育ったウィーダは、アントワープに住んで、犬が労役犬として酷使されているのを見て、非常に憤りを感じたようだ。引用すると、

パトラスエの一族は親から子へと、何世紀もフランダーズで苦しい

残酷な労役に服してきた——奴隷中の奴隷であり、庶民の中の犬であった、車の梶棒と馬具にゆわきつけられ、一生、荷車の擦傷に苦しみながら筋肉を無理につかったあげく、街路のかたい敷石の上で心臓がやぶれて死んでいくのだった。

(村岡花子訳)

と書いてある。当時といえども、物質的豊かさの頂点にあったミドルクラスのイギリス人の目から見ると、犬の酷使は野蛮な行為であることに違いなかった。このことも、翻訳しようと思わなかった理由の一つではないだろうか。もともと題名は A Dog of Flanders である。原書の端書にも the first modern dog story として評価されているとある。大の犬好きだったという著書ウィーダは、ネロに命を救われ、ネロと共に生き、ネロに殉じて死んでいったパトラッシュの、「名犬物語」を書いたのかも知れない。となるとなおさらのこと、地元では翻訳を敬遠したかっただろうと思われてくる。

さて、このような状況の中で、冒頭部分に述べたアメリカ映画実写版「フランダーズの犬」が公開されたのである。先に映画化された三作品も、ともにアメリカ映画で実写版であった。ハリウッドで撮影されたこの映画は、名の通った俳優をそろえたことでも話題となったが、日本では二通りの結末があることで注目された。私が興味をもったのも、そこであった。

公開中の一九九九年八月一三日付毎日新聞の記事は、「悲しすぎる!? 『フランダーズの犬』「映画化でハッピーエンド版も」「悲劇版」採用は日本だけ」の見出しで、その間の事情を報じている。公開に先だつ配給会社への試写会では「悲劇版の方は完成が間に合わず、登場したのはハッピーエンド版だった。ネロとパトラッシュが大聖堂で倒れるところ

までは同じだが、その後、仮死状態になって自分の葬式の夢を見たネロが『生きたい』と強く願って生還するというストーリーだ」という。試写をみた「ベルギーやイギリス、フランス、ロシアといったヨーロッパ諸国の配給会社を選んだのはすべてハッピーエンド版だった」ともある。理由は「死んでしまうのは可哀そうすぎて観客に受けにくい」からだという。日本側の意見は「やっぱり悲しいパターンで見たい」「死ぬのはつらいけれども原作に忠実の方がいい」などで、悲劇版の採用が決定されたとの由。八月七日付西日本新聞夕刊では、「外国では『フランダーズの犬』はそれほどポピュラーではない。日本では長年親しまれ、アニメでストーリーがよく知られているため、原作通りの悲劇版が選ばれた」とずばりの確である。テレビアニメで放映以来、何度も再放映されてきた経過と、その延長上のアニメ映画「劇場版/フランダーズの犬」の公開からわずか二年、今さらどうしてハッピーエンド版を選べようか。試写会に悲劇版が間に合わず、実際に見ることができなかったにもかかわらず、日本の配給会社が悲劇版を選んだということは、初めに結論ありき、だったからである。

初めに結論ありき、というのは日本側だけではなく、制作した側もそうであった。ハッピーエンドにするから制作したのである。ケビン・ブローディ監督自身、原作のままでは客は呼べないと明言している。客を呼ぶためにハッピーエンドにするのは、大前提であったのだ。それならばなぜ原作版も作ったかという点、原作はまったく正反対の結末にしたため、一応原作版も作るだけはおこうと、申し訳に作られたのである。もっともアメリカ映画では、相反する二つの結末を用意することは珍らしいことではないと、いくつかの例を先の毎日新聞で紹介している。映画の内容をみると、やはりハッピーエンド用に作られている。

め、悲劇版では伏線が生かされないところがいくつかある。ネロとアロアがジブシーたちのサーカスに紛れこみ、歓迎されて占い師に占ってもらうシーン。占い師は「ネロは将来、大物になって人々に感動を与えらる」二人はもとと出会う運命で、いつの日にか本当に幸せをつかむ」と予言する。そしてネロが全身全霊をかけて描いたコンテストに出品する絵は、その日見たジブシーたちの姿であった。観客は、ネロにどんな不幸が襲いかかろうとも、その占い通り最後に幸せが訪れると予想しているから、安心して見ていられるというわけである。

もう一つ、これは私の予想の範囲ではあるが、ハッピーエンドで蘇ったネロの前に現れる実の父親というのは、恐らくは、いつもネロに親切でネロの才能を認めていた画家その人であったらう。劇中、才能のある女弟子の話が画家の口から何度か出てくるが、それがネロの亡き母親だったに違いない。悲劇版では女弟子の話は何の意味もなく終わる。

この映画は実写で、その時代をリアルに表現している。村で唯一の金持ちといってもコゼツは紳士ではなく労働にあけくれ、アロアもその母も家の仕事や農作業をする農家のおかみさん、田舎娘である。寒村でのネロたちの貧乏な暮らしぶりも現実的に描かれる。画家の家では芸術が語られるが、ネロの日常生活はおよそ都会の豊かさとか文化とかの入りこむ余地はまったくない。その描写は、原作のイメージをそっくり再現しているといつてよい。

ところで、今までこの結末を悲劇版とハッピーエンド版に分けて述べてきたが、原作とくらべると、ハッピーエンド版は論外として、悲劇版でもまだ大いなる救いがある。第一は例の画家との交流である。ルーベンスについて語り、絵の指導をし、画材まで与えてくれた。ネロは臆せず接しているが、階級も生活程度も何もかも別世界のこの交流があつて

初めて、ネロは大ぶりの満足すべき作品を展覧会に出品することができたのである。第二が鍛冶屋の存在。火事のあとも変わらずに親切を続けてくれた。ネロには堂々と味方してくれる村人もいたのである。

そして第三。ネロの最期にルーベンスが出てきて話しかけてくれるのである。いかにも唐突で奇異な感じもするが、ルーベンスを崇拜している少年にとって、最大の餞が用意されたわけである。ハッピーエンドではこの会話からネロは生きる方向へ向かっていったのである。悲劇版の方でも、ルーベンスに連れられて亡き母の許へ行き、しっかりと抱き合うのである。巨匠ルーベンスはネロの母親の才能をも認めており、ここにネロ、母親、ルーベンスの絆がはつきりと結ばれたこともあり、同じ死ぬ結末といつても、救いのある結末になっている。

ハッピーエンドの方は、残念ながら未見なので、あら筋に頼るほかはないが、どんな苦労も最後は報いられるという、アメリカン・ドリームからすると、ネロを死なせてはならぬ、生きて幸せな人生を歩んで欲しいという平均的な読者の願望を、映像で実現させたかったであろう。苦労の末に死んだというのでは、ネロは浮かばれないからである。そのような映画は、普通の大人にとつても気持ち悪ささせるだけであるし、子どもにとつても、苦労を乗り越えようと努力する力を奪い、どうせ良くはならないという諦め、人間不信、無力感などを助長するといったあくまでも教育上の悪影響を確信しているからである。

ネロは絵の天才少年であり、プライドを持っていた。温和な性格で正直者で働き者であるが故に、辛酸をなめた。ここで生まれ変わって幸せな生活に入るところがどのように表現されているか、私などもいつか見届けたいものである。

ここでふれておきたいのが、アメリカン・ドリームの具現者の典型で

あるウォルト・ディズニーである。子ども時代にはもっぱら夢と希望を与えようという考え方であるから、ディズニーの物語はすべてハッピーエンドである。だからとくにアメリカの子どもたちはディズニーの物語を見たあとは、幸福感、満足感、充実感にひたることができるのである。そしてさらに世界中の子どもたちを魅了してやまないのも当然のことであろう。

しかしながら、あまりに甘すぎて首をかしげたくなる場合もある。アンデルセンの『人魚姫』を書きかえた『リトル・マーメイド』がそれである。

終盤、人魚姫は愛する王子の命を奪えば人魚に戻れるが、奪わなければ泡となって消えるという、二者択一をせまられる。周知の通り、人魚姫は王子の幸せを願ひ、自分は泡となって消えていく。しかし空気の精となって、空気の娘たちといっしょに空へ昇っていき、三〇〇年後に神の許へ行く日待つという、天上の祝福を得る「その後」がある。

『リトル・マーメイド』の方は、海の王トリトンの娘アリエルがヒロインである。アリエルは魔女の魔法によって、声を差し出すかわりに人間になり、王子のそばに行く。ここまでは原作にだいたい近いが、これからが違っている。王子の花嫁になる娘は実はあの魔女で、アリエルの声を使って、嵐の日に王子を助けた娘になりすましていたのである。正体を知った海の仲間は力を合わせ、王子も戦いに加わり魔女をやっつける。父トリトンはアリエルの気持ちを知って、彼女を人間に変える。王子とアリエルは結婚し、いつまでも幸せに暮らした——というのである。ディズニー社は豪華客船「リトル・マーメイド号」を持っていて、子どもたちが、海と船の生活を楽しめるようになっていく。夢と希望にあふれた船上生活。夢と希望にあふれたアリエル。だがちょっと待てよ。

ディズニーランドやリトル・マーメイド号はよいとしても、『人魚姫』と『リトル・マーメイド』の間には、翻案というには大きすぎる隔りがあると云わざるを得ない。あまりにもお手軽に、アメリカン・ドリームが、サクセス・ストーリーが、手品の如く湧き出でてきて、原作にあったもの、人魚は人魚であって人間ではないという宿命や、王子のために自分の命を惜しまないという没我的愛や、泡になったあとの精神的満足などがまったく無視され、現世的幸せのみがクローズアップされて「二人はいつまでも幸せに暮らしました」というのでは、いかにも安直にすぎない。もはや原作にヒントを得た、まったく別の作品と解釈するほかはない。ディズニー作品には、どの作品にも夢と希望のフィルターがかけられている。ひとときのドリームを楽しむための薔薇色のフィルターなのだ。

「終わり良ければすべてよし」——結局、結末が悲劇であっても、それが作者のねらい通りに読者に受け取ってもらえれば、それは「すべてよし」なのである。ハッピーエンドだからといって、「すべてよし」とは限らない。テレビアニメ「フランダースの犬」が、これほどに日本人の心に感銘を与えているのは、終わりがよかったからである。そしてその終わりは「始めに結論ありき」だったのである。テレビ放映中、最終回が近づくにつれて「ネロとパトラッシュを死なせないで」との嘆願の手紙が、放送局や新聞の視聴者欄に殺到したとのことである。それは新聞の社会面にも取り上げられるほどであった。いよいよ最終回、抱きあって倒れているネロとパトラッシュ——。大聖堂の高い天井から、静かに天使たちが舞い降りてきて、二人をそっと抱き起こす。目をさました二人は、七人の天使たちに導かれ、天へと昇っていくのである。最後の

語りを引用しよう。

ネロとパトラッシュは、おじいさんやお母さんのいる遠いお国へ行きましました。もうこれからは、寒いことも、悲しいことも、おなかのすくこともなく、みんなといっしょに楽しく暮らすことでしょう。

映像の方はネロがパトラッシュの引く牛乳集配のあの車に乗って、大聖堂から空へ駆け上って行く。まわりには七人の天使たちがつきそって飛んでいく。何と神々しく、荘厳な光景であろうか。キリスト教的な死ぬ結末には違いないが、キリスト教的見地からは、至福の終焉といえるのである。

まさにこの昇天のシーンこそ、スポンサーであるカルピス社の当時の社長、土倉富士夫氏の強い要望だったのである。その間の事情は、別冊宝島七五八号(二〇〇三・四・二七)にくわしい。同誌所載の監督の話では、当時のアニメは「ほとんどはスポーツやSF的なもの、あるいはギャグ作品」ばかりで『フランダーズの犬』のようなシリアスな人間ドラマは珍らしい存在だった。であるから、昇天のシーンが『フランダーズの犬』を推薦させたと言ってよい。まさに、「始めに結論ありき」なのであった。土倉氏は敬虔なクリスチャンであったというから、死は悲劇ではなく、神の御許へ召され永遠の生命を得ることなのである。氏は毎回の脚本にも目を通し、ラストシーンは絵コンテの段階でチェックをしたというほど、この作品に熱心であったという。最後の方、ルーベンスの宗教画三幅のあの絵が大写しになる場面で、効果的に流れる「アベマリア」も、氏の提案だったそうである。

土倉氏の熱意と、それに応えた製作側の黒田監督やスタッフの力量が、

今なお日本中の子どもや大人たちをも感動させ続ける作品に仕上げたわけである。そしてその感動は、アントワープに銅像を作らせるに至った。映像の方は世界中に流され、ことにスペイン、ポルトガルなどのカトリックの国や東南アジアなどで人気を得ているそうである。映画と違ってテレビは、わざわざ映画館に足を運ばずとも、自宅で見ることもできるし、ビデオやDVDで見えることもできる。分量も五二話ある。影響力の大きさは量り知れない。日本のアニメは今や世界に向けて、日本文化の発信源の一つとしての地位を固めたのである。映画においても、「千と千尋の神隠し」「ハウルの動く城」に至って、日本のアニメは世界のトップに立ったと言ってよい。

そろそろここで結論に移ろう。原作者ウィーダは晩年は精神的にも経済的にも窮地に追いつめられ、大ばかりに囲まれて暮らしていたという。フィレンツェの、かつての社交界の花形は、作家としてあるいは生活者として、周囲の人々に荒涼たる心象風景を見たであろう。それ故になおさらウィーダは酷薄な実社会の中に、現実には存在しないネロとパトラッシュという究極の聖性を作り出したに違いない。ウィーダの時代も現代も、私たち人間は皆、ネロという聖者とは絶縁された存在である。パトラッシュもまた、犬という動物の生物的本能の限界を越えた聖犬である。英語版にはタイトルの下にA Story of Noel Christmas・ストーリーとある。ウィーダは私たち人間の本性が、村人たちの冷酷さやエゴイズムを共有するものとして、人間の罪そのものを問うたのではないだろうか。救いのない結末の原作が、救いがあるかのように改訳、翻案、再話され、新しい本となり、さらにはアニメや実写などの映像を通して、現在へ連続と伝えられて来ることになった。この生命力は、もともと原作にこめられていた死をも怖れぬ神への信頼と並はずれた芸術への畏敬

の念というほかはないのである。

二〇〇五・二・二五

参考文献

- A Dog of Flanders*. Ed. Philips Smith. Dover Publications, Inc. 1992
『世界名作劇場大全』松本正司 同文書院 一九九九
『世界児童・青少年文学情報大辞典』藤野幸雄編訳 勉誠出版 二〇〇〇
『二〇世紀アメリカ映画事典』カタログハウス 二〇〇二
『フランダーズの犬』大好き』鬼塚りつ子 小峰書店 一九九二